

ヨシュア記 通読

2月



(2月 1日)「ヨシュア記 10 : 16~28」

ヨシュアは言った。「恐れてはならない。おののいてはならない。強く、雄々しくあれ。あなたたちが戦う敵に対して主はこのようになさる。」

(ヨシュア記 10 章 25 節)

- ・このヨシュア記 10 章から 11 章にかけての記述は、かなり残酷な内容になっています。映画になったら、「R-18 指定」がつけられるのではないのでしょうか。イスラエル軍は 5 人の王をマケダの洞穴に追い込みます。
- ・イスラエルの人たちは、まず“敵”に決定的な打撃を与えます。まさしく「敵を憎む」人たちがそこにはいたのです。さらに 5 人の王たちを洞穴から引き出し、首を踏みつけ打ち殺し、木にかけ、夕方までさらすのです。
- ・イエス様は「あなたがたも聞いているとおり、『隣人を愛し、敵を憎め』と命じられている。しかし、わたしは言うておく。敵を愛し、自分を迫害する者のために祈りなさい」と語ります。旧約の残酷な出来事を、否定されるのです。

(2月 2日)「ヨシュア記 10 : 29~35」

主がラキシユをイスラエルの手に渡されたので、二日目には占領し、剣をもって町の住民をすべて撃ち、リブナと全く同じようにした。

(ヨシュア記 10 章 32 節)

- ・ヨシュア率いるイスラエル軍は、マケダからリブナ、ラキシユ、エグロンへと侵攻を繰り返していきます。そのすべての場所で王を滅ぼし、住民をすべて撃ち、町を占領していくのです。
- ・これは、歴史的事実でしょうか。日本にも、古事記や日本書紀という歴史書があります。古事記の目的は天皇家の歴史を記すこと、そして日本書紀の目的は日本という国の成立を記すこと言われています。
- ・聖書も神さまとの関係を伝えるという目的があるので、歴史的事実よりも神学的意味が大切にされています。神さまの前では、「人間の王」は小さく弱いのだということが強調されているのかもしれませんが。

(2月 27日)「ヨシュア記 18 : 21~28」

ツェラ、エレフ、エブス、すなわちエルサレム、ギブア、キルヤト・エアリム、以上十四の町とそれに属する村。以上がベニヤミンの人々が氏族ごとに受け継いだ嗣業の土地である。

(ヨシュア記 18 章 28 節)

- ・ここには、ベニヤミン族に与えられた町や村の名前が列挙されています。その 28 節に、「エブス、すなわちエルサレム」という記述があります。エルサレムという土地はイスラエルの人たちが征服する前は、エブスと呼ばれていました。
- ・そしてこの町を治めていたのは、エブス人でした。彼らが住むエブス（エルサレム）は小高い丘にあり、自然の要塞でした。イスラエル人がそこを奪うのは、ダビデ王の時代になってからでした。
- ・ダビデ王が出てくるのはまだまだ先のことなので、彼らに土地が与えられたとはいえ、すぐに自分たちのものになったというわけではなさそうです。というよりも先住民がいるにもかかわらず、土地を配分するのはどうかと思いますが。

(2月 28日)「ヨシュア記 19 : 1~9」

シメオンの人々の嗣業の土地はユダの人々の領土の一部であった。ユダの人々への割り当て地が多すぎたため、ユダの嗣業の土地の中にシメオンの人々は嗣業の土地を受け継いだのである。

(ヨシュア記 19 章 9 節)

- ・続いてシメオン族です。聖書地図を見ると、一番南の方にシメオンと書かれています。しかしユダやペリシテとの境を示す線は書かれていません。聖書には彼らの土地はユダの人々の領土の一部だと書かれています。
- ・歴史的にはユダ王国が力を持つことになります。そのときにシメオン族はどうなっていくのでしょうか。聖書に登場した時に、一緒に読んでいきましょう。さて彼らの嗣業の地の中に、ベエル・シェバという場所があります。
- ・この地はアブラハムやイサクの時代にも出てきた場所です。イシュマエルの母ハガルがさまよい、またアブラハムやイサクがアビメレクと友好的な契約を結んだ地です。ベエルは井戸、シェバは 7 や誓いという意味を持ちます。とても重要な場所です。

(2月 25日)「ヨシュア記 18 : 8~10」

ヨシュアは、主の前で彼らのためにくじを引き、イスラエルの人々に決められた割り当てに従って土地を分配した。(ヨシュア記 18 章 10 節)

- ・7つの部族の3人ずつ、合計21人が土地の記録を作って帰ってきました。いったいどれくらいの時間が掛かったのでしょうか。それぞれの土地には前から住んでいた人もいたでしょう。しかしそのような記録はありません。
- ・また21人がどのように分かれて調査しにいったのかも、何も書かれていません。自分たちの土地になるとわかっている場所であれば一生懸命調べるでしょうが、土地の割り当てはくじで決められました。
- ・聖書にはたびたび「くじ」が出てきますが、これは偶然や運ではなく、神さまのみ心を求める行為です。イエス様の12弟子の一人、イスカリオテのユダが欠けて一人補充することになったときも、くじが使われてマティアが選ばれました。

(2月 26日)「ヨシュア記 18 : 11~20」

ベニヤミンの人々の部族が氏族ごとにくじを引いた。彼らがかくじで割り当てられた領域は、ユダとヨセフの人々の間にあった。

(ヨシュア記 18 章 11 節)

- ・最初にくじを引いたのは、ベニヤミン族です。ベニヤミンはヨセフの弟で、ヤコブが愛したラケルから生まれた息子はこの二人だけです。創世記 37 章以降のヨセフ物語をみても、ヨセフもヤコブもベニヤミンを寵愛していたことがわかります。
- ・その割には小さな土地しか与えられていないようにも感じます。ただこのベニヤミン族ですが、士師記 19 章では大きな罪を犯すことになります。どのような罪かは、6月をお待ちください。
- ・17 節には「ルベンの子ボハンの石」という言葉があります。15 章 6 節にも出てきたのを、覚えておられますか。ベニヤミン族の南側はユダ族に与えられていました。その境界を示すのにも出てきていました。よほど有名な石なのでしょう。

(2月 3日)「ヨシュア記 10 : 36~43」

ヨシュアがただ一回の出撃でこれらの地域を占領し、すべての王を捕らえることができたのは、イスラエルの神、主がイスラエルのために戦われたからである。(ヨシュア記 10 章 42 節)

- ・ヨシュア率いるイスラエル軍は、さらにエグロンからヘブロン、デビルへと行きます。そこでも同じように、町を占領していきます。山地やネゲブ、シェフェラ、傾斜地に至るまで、征服していくのです。
- ・それもヨシュアは、ただ一回の出撃でこれらのことを成し遂げたというのです。ただ聖書はその理由として、「イスラエルの神、主がイスラエルのために戦われたからである」と書きます。
- ・これらの出来事の意味は、「神さまが共におられる」ということであって、「神さまに頼ればすべての土地が手に入る」ということではないはずです。しかし世界を見渡すと、聖戦という名の元にこれと同じことが繰り返されているようで悲しいです。

(2月 4日)「ヨシュア記 11 : 1~9」

主はヨシュアに言われた。「彼らを恐れてはならない。わたしは明日の今ごろ、彼らすべてをイスラエルに渡して殺させる。あなたは彼らの馬の足の筋を切り、戦車を焼き払え。」(ヨシュア記 11 章 6 節)

- ・気の重くなる内容が続きます。しかしこれらの箇所をきちんと読むことは、今もやまない戦火の理由を知ることにもつながります。「主が彼らをイスラエルの手に渡されたので」という言葉が、ある人たちには正義なのです。
- ・特に「馬の足の筋を切り」という行為は、残虐な動物虐待です。ただこの時代、馬は軍隊用の動物でした。「軍用」のものだから、その力をそぎなさいという命令のように思います。
- ・聖書のイスラエルが多くを征服したという出来事は、いわゆる「歴史書」には書かれていません。これはあくまでも、神学的事実と言えるものです。神さまのみ手によって、“当時の”イスラエルが土地を得た、ということを行っているのにすぎません。

(2月 5日)「ヨシュア記 11:10~15」

主がその僕モーセに命じられたとおり、モーセはヨシュアに命じ、ヨシュアはそのとおりにした。主がモーセに命じられたことを行わなかったことは何一つなかった。
(ヨシュア記 11 章 15 節)

- ・出エジプトの際、約束の地に向かったときに民を率いたのはモーセでした。神さまはその行く先々でモーセを導き、またあらゆることを命じていきました。モーセはさらに、十戒や律法を神さまから与えられました。
- ・モーセはそれを、ヨシュアに伝えていきました。モーセは荒野でさまよっている中で神さまに背き、約束の地に入ることを許されませんでした。そこで民の指導は、ヨシュアに託されたのです。
- ・新約聖書には、モーセとエリヤがイエス様と語り合う場面 (マルコ 9:2~8) が出てきます。モーセはエジプトから民を導き出した偉大な指導者として覚えられていました。そしてヨシュアもまた、民を約束の地に導き入れた偉大な指導者です。

(2月 6日)「ヨシュア記 11:16~23」

ヨシュアはこうして、この地方全域を獲得し、すべて主がモーセに仰せになったとおりにした。ヨシュアは、それをイスラエルに各部族の配分に従って嗣業の土地として与えた。この地方の戦いは、こうして終わった。
(ヨシュア記 11 章 23 節)

- ・ようやく、イスラエル軍の占領の記事が終わります。たくさんの王やその土地に住んでいた人たちが、命を落としたことでしょう。「滅ぼす」という言葉が簡単に使われていることに、不快感を持たざるを得ません。
- ・大河ドラマや戦争映画も、どの視点から見るとによってその景色は大きく変わっていきます。2006年に、硫黄島の戦いを描いた映画が2本公開されました。日本兵の視点から描いた「硫黄島からの手紙」がその1本です。
- ・そして同じ出来事をアメリカ側の視点から描いたのが、「父親たちの星条旗」です。この映画を通して、物事は様々な面から見る必要があることを教わりました。ぜひ一度ご覧ください。

(2月 23日)「ヨシュア記 17:14~18」

ヨシュアは答えた。「あなたの民の数が多くて、エフライムの山地が手狭なら、森林地帯に入って行き、ペリジ人やレファイム人の地域を開拓するがよい。」
(ヨシュア記 17 章 15 節)

- ・ヨセフの子であるマナセ族とエフライム族は、神さまの祝福を受け、その人数はとて多くなりました。創世記 37~45 章に書いてあるヨセフの貢献度からすると、当然のようにも思えますが。
- ・16 章にもありますが、そのこともあって彼らはマナセ族、エフライム族別々に、嗣業の地を得ます。聖書地図を見ると、かなり広大な土地が与えられたようです。しかしその中には、未開拓のところもあったようです。
- ・16 章 10 節、17 章 13 節、そして今日の 17 章 18 節に、カナン人の記述があります。これほど聖書に書かれるということは、よほど「目の上のたんこぶ」だったのでしょう。結果的にカナン人に強制労働をさせますが、追い出すことはできなかったようです。

(2月 24日)「ヨシュア記 18:1~7」

イスラエルの人々の中には、まだ嗣業の土地の割り当てを受けていない部族が七つ残っていた。
(ヨシュア記 18 章 2 節)

- ・ヨルダン川を渡って西側に来たイスラエルの人々のうち、ユダ族とヨセフの一族 (マナセ族、エフライム族) は土地を得ました。ルベン族とガド族とマナセの半部族はすでに、東側に嗣業の地を得ています。
- ・イスラエル 12 部族のうち、祭司家系であるために土地を与えられないレビ族を除くと、あと七つの部族が残ります。その部族にも土地を割り当てる必要があります。そこでヨシュアは各部族から 3 人ずつ出させ、巡回して土地の記録を作らせます。
- ・ただ地図で見てもわかるように、簡単に測量できるような広さではありません。大体の距離を測り、山やオアシスの場所を記録し、不公平がないように分けたということでしょうか。ただかなり大雑把な記録にはなったと思います。

(2月 21日)「ヨシュア記 16:1~10」

彼らがゲゼルに住むカナン人を追い出さなかったため、カナン人はエフライムと共にそこに住んで今日に至っている。ただし、彼らは強制労働に服している。(ヨシュア記 16 章 10 節)

・聖書の後ろにある地図(3 カナンへの定住)を見ると、「ヨセフ」の土地がないことに気づかされます。ヤコブの息子の中で一番活躍したともいえる彼ですが、「ヨセフ族」という名前は出てきません。

・その理由はいろいろと考えられますが、一つには「彼は二倍の嗣業の地を得た」というものがあります。ヨセフにはマナセとエフライムという二人の息子がいました。その息子たちにそれぞれ嗣業の地を与えることで、結果的に他の一族の倍の土地を得ることになるのです。

・4 節以下にはまず、エフライム族が得た土地が書かれます。地図で見るとかなり広いですが、そこには開拓されていない場所やカナン人が住んでいる所もあったようです。そのカナン人を彼らは追い出しませんでした。

(2月 22日)「ヨシュア記 17:1~13」

彼女たちは、祭司エルアザル、ヌンの子ヨシュア、および指導者たちの前に進み出て、「主はわたしたちにも親族の間に嗣業の土地を与えるように、既にモーセに命じておられます」と申し立てた。彼女たちは、主の命令に従い、父の兄弟たちの間に嗣業の土地を与えられた。(ヨシュア記 17 章 4 節)

・この時代、ユダヤでは男性しか土地を相続することができませんでした。そうすると子どもが女性だけの場合、その家は途絶えてしまうことになりま

す。日本の「跡取り」問題と同じようなものです。

・マナセの息子ツェロフハドには、息子がありませんでした。このままでは相続地がなくなり、家系が途絶えてしまいます。そこで彼の娘たちがヨシュアに対して、相続地を求めたのです。

・この訴えは認められ、彼女たちは土地を得ます。「お家取りつぶし」とはならなかったのです。ただし他の民族に土地が流出しないように、後に同族との婚姻しか認めないという法もできたようですが。

(2月 7日)「ヨシュア記 12:1~6」

主の僕モーセの率いるイスラエルの人々が二人の王を打ち殺した後、これらの地域は主の僕モーセによってルベン人、ガド人、マナセの半部族に領地として与えられた。(ヨシュア記 12 章 6 節)

・ようやく 11 章までで、残酷な描写は終わりました。13 章からは占領した土地をどのようにイスラエル 12 部族で分けたのかということが書かれますが、この 12 章ではこれまでの征服の結果が書かれます。

・まず 6 節までには、ヨルダン川の東側のことが書かれています。後ろのページに聖書地図が付いている新共同訳聖書をお持ちの方は、「第 3 図 カナンへの定住」を見ていただくと、よくわかります。

・ヨルダン川の東側(地図では右側)には、マナセ、ガド、ルベンという名前が並びます。マナセはヨセフの子、ガドとルベンはヤコブの子の名です。その名はそれぞれの民族の名となりました。そして地図にある場所を領地としていったのです。

(2月 8日)「ヨシュア記 12:7~8」

それは山地、シェフェラ、アラバ、傾斜地、荒れ野、ネゲブであって、そこにはヘト人、アモリ人、カナン人、ペリジ人、ヒビ人、エブス人が住んでいた。

(ヨシュア記 12 章 8 節)

・続いてヨルダン川の西側(地図では左側)です。ダン、ナフタリ、アシェル、ゼブルン、イサカル、マナセ、エフライム、ベニヤミン、ユダ、シメオンという名前が並びます。それぞれヤコブの子や孫の名前です。

・マナセは東側にも、領地を与えられていました。13 章以降には「マナセの半部族」という言葉が出てきます。マナセ族は、二つに分けられたということです。またダンも、上下に分けられています。

・具体的にどのように分けられていったかは 13 章以降に書かれていきますが、「領土を分け与える」という流れは、戦国時代に手柄をあげた大名に褒美を与えるのと同じように感じてしまいます。

(2月 9日)「ヨシュア記 12 : 9~24」

ケデシュの王一名、カルメルのヨクネアムの王一名、ドル台地のドルの王一名、ガリラヤのゴイムの王一名、ティルツアの王一名、計三十一名の王である。
(ヨシュア記 12 章 22~24 節)

- ・イスラエル軍は、31名の王を征服したと聖書は伝えます。各地を治める王は、当然一人ずつです。しかし聖書にはいちいち、「一名」と書かれています。これは何かの記録のようにも思えます。
- ・この31名の王の元に、どれだけ多くの人があったのだろうかと思えます。イスラエルの人たちは「神の名のもとに」、すべてを滅ぼし、奪いました。大河ドラマもそうですが、人が亡くなっている以上、これは「良い出来事」とは考えにくいです。
- ・18節に、「シャロンにあるアフエクの王」とあります。奈良基督教会には、シャロンという部屋があります。シャロンは理想郷を意味し、またその地に咲く「シャロンのばら」は旧約聖書では純潔の象徴とされます。しかし、ここでは悲しい出来事がありました。

(2月 10日)「ヨシュア記 13 : 1~7」

ヨシュアが多くの日を重ねて老人となったとき、主は彼にこう言われた。「あなたは年を重ねて、老人となったが、占領すべき土地はまだたくさん残っている。
(ヨシュア記 13 章 1 節)

- ・唐突に、ヨシュアが老人となったという記述があります。ヨシュア記は24章まであり、ようやく折り返したところですが、ヨシュア自身も24章まで登場するので、この記述が何を意味するのかはよく分かっていません。
- ・一説にはこの土地を配分した記録は、後から挿入されたのではないかとされています。もしそうだとすれば、イスラエルの人々が「聖書に書かれた」という土地取得の根拠は崩れてしまうようにも思います。
- ・特に3節の「ガザ」という地名を見たときに、その思いは強くなります。聖書に書いてあろうとなかろうと、武力で人々の生活を脅かすことはあってはならないとわたしは思います。みなさんはどう思いますか。

(2月 19日)「ヨシュア記 15 : 13~19」

カレブは、「キルヤト・セフェルを撃って占領した者に娘アクサを妻として与えよう」と約束した。
(ヨシュア記 15 章 16 節)

- ・エフネの子カレブは、ヨシュアと共にエジプトから出てきた人たちの中で「約束の地」に入ることを許された人物です。14章6~15節に彼は登場しますが、すでに85歳になっていたということです。
- ・その彼には、ヘブロンが与えられました。そこにはまだ、住民が住んでいました。そこでカレブは、そこを攻めて占領した人に娘を与えることを約束します。聖書にはよくこのような約束が出てきますが、「娘はあなたの持ち物ではない」という声が聞こえてきそうです。
- ・そのときにそこを占領したのは、オトニエルという人物でした。彼はカレブの兄弟の息子だったので、カレブの娘アクサとはいとこにあたります。このオトニエルという名前を覚えておいてください。彼は士師記で活躍します。

(2月 20日)「ヨシュア記 15 : 20~63」

ただし、ユダの人々はエルサレムの住民エブス人を追い出せなかったため、エブス人はユダの人々と共にエルサレムに住んで今日に至っている。
(ヨシュア記 15 章 63 節)

- ・今日の通読は、とても長いですが、しかもカタカナの、それも知らない町や村の名前が列記されているだけです。日本の町や村であれば、「あっ、ここ行ったことある」とか、「この名物、おいしいらしいよ」とか考えながら読むことができます。
- ・しかし、「シャアラタイム、アディタイム、ゲデラ、ゲデロタイム」と続けられても、何の思いも感動も生まないとまで言うのは、言いすぎでしょうか。ただ現在のイスラエルが建国される前、自分が住んでいる場所の地名を聖書に見つけた人はどう思ったでしょうか。
- ・この地域はユダ王国が滅亡した後、ハスモン朝を除けば現在のイスラエル国が建国されるまで、ユダヤ人国家ではありませんでした。そのような状況の中で、これらの地名を聖書に書き続ける。そこには何の意味があるのでしょうか。

(2月 17日)「ヨシュア記 15:1~4」

ユダの人々の部族が氏族ごとにくじで割り当てられた領土は、最も南にあって、エドムと国境を接し、ネゲブのツインの荒れ野に及んだ。

(ヨシュア記 15 章 1 節)

- ・ここから、各部族に与えられた土地のリストに入ります。聖書についている聖書地図を見ながら読むと、何となくどこのことを言っているのかがわかります。まずはユダ族について語られます。
- ・ユダはヤコブとレアの子どもの名前です。ルベン、シメオン、レビ、ユダと続く 4 番目の子どもです。しかしマタイによる福音書 1 章を見てみると、ユダの子孫にダビデやヨセフがいるのに気づかされます。
- ・ユダとタマルの物語(創世記 38 章)を読むと神さまに怒られそうなことをしているユダですが、とても広い土地を与えられ、その血筋にイエス様が名を連ねたことはとても印象的です。ヨセフに嘆願した(創 44:18~34)ことが、神さまの目に留まったのでしょうか。

(2月 18日)「ヨシュア記 15:5~12」

西境は大海の沿岸である。以上が氏族ごとにユダの人々を囲む境界である。

(ヨシュア記 15 章 12 節)

- ・ユダは南の広い土地を得ました。歴史的には紀元前 10 世紀から紀元前 6 世紀にかけて、イスラエル王国は北イスラエル王国とユダ王国に分裂していきます。そのあたりのことは、列王記に書かれています。
- ・6 節に、「ルベンの子ボハンの石」とあります。きっと聖書が書かれた時代には、誰もが知る場所だったのでしょう。ただ地元の人しか伝わらない可能性もあります。わたしが奈良に来た時、「行基さんの前に集合です」と言われて、意味が分からなかったのを思い出します。
- ・聖書の時代、測量した正確な地図などはありませんでした。そこで目印を口で伝え、子孫に残していったのだと思います。ただそうすると、境界線をめぐって争いも起きたでしょう。そもそも隣国との合意もなかったでしょう。

(2月 11日)「ヨシュア記 13:8~14」

ただ、レビ族には嗣業の土地は与えられなかった。主の約束されたとおりに、イスラエルの神、主に燃やしてささげる献げ物が彼の嗣業であった。

(ヨシュア記 13 章 14 節)

- ・ここでは、ヨルダン川東側の土地について書かれています。その中に「バシヤンのオグの王国全体」という記述があります。バシヤンのオグについては、申命記にこのように書かれています。
- ・「バシヤンの王オグは、レファイム人の唯一の生き残りであった。彼の棺は鉄で作られており、アンモンの人々のラバに保存されているが、基準のアンマで長さ九アンマ、幅四アンマもあった。(申命記 3 章 11 節)」
- ・レファイム人は、巨人でした。そのため彼の棺も巨大だったようです。1 アンマは約 45cm なので、長さ 4m、幅 1.8m という大きさでした。昔そういうこともあったんだよ、と思いを語りながら、その土地に移り住んでいったのでしょうか。

(2月 12日)「ヨシュア記 13:15~23」

そのほか、イスラエルの人々は、ベオルの子、占い師バラムを剣で殺した。

(ヨシュア記 13 章 22 節)

- ・ここから、それぞれの部族に分け与えられた場所が列記されていきます。まずはルベン族です。書かれている町の名に「バアル」がつけられたものが 2 か所(バモト・バアル、ベト・バアル・メオン)あります。
- ・バアルとは、旧約聖書によく出てくる異教の神の名前です。列王記に出てくるイスラエルの王は、バアルとの接し方がよく問題になっていました。主なる神さまのみに仕えることができるのか、それが大切なのだと何度も書かれています。
- ・イスラエルの神さまは、「ヤハウエ」と呼ばれますが、「神」という一般的な語は「エル」です。調べてみると、エルが付く地名が多くあることに気づかされます。ペヌエル、イズレエル、そしてエルサレム。イスラエルにもエルが付きますね。

(2月13日)「ヨシュア記13:24~28」

以上がガドの人々が氏族ごとに与えられた**嗣業の土地**であり、**町村**である。

(ヨシュア記13章28節)

- ・続いて、ガドの人々の**嗣業の土地**です。嗣業という言葉は、あまり聞きなれないと思います。これは聖書によく使われる言葉で、神さまによって与えられ、子孫へと受け継がれるべき財産、特に土地を意味する言葉です。
- ・単に一時期与えられるというのではなく、その一族、子孫によってずっと持ち続けられるものなのです。ユダヤでは、簡単に土地を売買することはできませんでした。嗣業の土地は、永遠にその一族のものという考え方なのです。
- ・だから、もめるのです。たとえば竹島や北方領土など、どこの国の領土なのか、議論されることがあります。「聖書にこう書いてあるから」、その主張ばかり繰り返していたら、なかなか問題は解決しないでしょう。

(2月14日)「ヨシュア記13:29~33」

モーセはレビ族に対しては**嗣業の土地**を与えなかった。主の約束されたとおり、彼らの**嗣業はイスラエルの神、主御自身**である。

(ヨシュア記13章33節)

- ・ヨルダン川の東側の土地の配分が終わります。どうしてルベン族、ガド族、マナセの半部族には東側の土地が与えられたのか。それは彼らがヨルダン川を渡って、「約束の地」に入ることを拒んだからでした。
- ・民数記32章に、その様子が書かれています。彼らは家畜を多く持っており、ヨルダン川の東側に家畜に適した土地を見出します。そこで彼らはその土地を与えてほしいとモーセに願うのです。
- ・しかし彼らは東側に居続けたのではなく、他の部族と共に西側に行って戦います。臆病風に吹かれて東側に残ったというわけではなく、羊を良い環境で飼うために、東側の土地を選んだということでした。

(2月15日)「ヨシュア記14:1~5」

ヨセフの子孫がマナセとエフライムの二つの部族になっていた。レビ人は、**カナンの土地の中には住むべき町と財産である家畜の放牧地のほか、何の割り当て地も与えられなかった。**

(ヨシュア記14章4節)

- ・ヨルダン川の東側は、ヨルダン川を渡る前に存命中のモーセによってその割り当てが決められていました。モーセはヨルダン川を渡ることができなかったため、西側の割り当てを決めるのは誰でしょうか。
- ・ヨシュアはその割り当てを自分だけではなく、祭司エルアザルと共におこないます。それも「くじ」によって割り当てたとあります。とても民主的な方法であり、また神さまのみ心に委ねる姿勢もみられます。
- ・さて、ヤコブ(イスラエル)の息子は12人でした。そのうち祭司の家系であるレビ人には**嗣業の土地**は与えられません。その代わりにヨセフの子、マナセとエフライムがそれぞれ一つの部族として数えられたため、12部族というのは変わらないことになります。

(2月16日)「ヨシュア記14:6~15」

主の僕モーセがわたしをカデシュ・バルネアから遣わし、この地方一帯を偵察させたのは、わたしが四十歳のときでした。わたしは思ったとおりに報告しました。

(ヨシュア記14章7節)

- ・民数記32章11節に、このような神さまの言葉があります。「エジプトから出て来た者のうち二十歳以上の者は、一人として、わたしがアブラハム、イサク、ヤコブに誓った土地に入らせない。わたしに従いとおさなかったからである」。
- ・しかし続く12節には、こうあります。「ただし、ケナズ人エフネの子カレブとヌンの子ヨシュアは別だ。彼らは主に従いとおしたからである」。カナンの地を偵察した時に、ヨシュアとカレブは否定的な言葉を語らなかったのです。
- ・それ以来カレブの名が出てこなかったのも、どうしたのか心配していました。神さまが言った通り、ちゃんと「約束の地」に入れたようです。そして85歳になったカレブは、「主の言葉」を守るように求めます。その願いは認められました。